



早稻田大學附屬
 圖書館
 寄第 川田氏寄託
 654
 第 200 冊
 第 3 冊
 2994
 出帶許不外
 34



俄羅斯紀聞別編

四

俄羅斯紀聞別編目次

第一冊

野史獨語

或問防海邊記



門 87
號 3038
卷 334

特
門 8
2994
34

野史獨談

重好法師の思ふ所をいひて凡そ後如くること
云んまきれ他人の事幸に思ふ又山人を
胸懐へて堪らぬ一或は陛下に言上し我
師の白ひ自刃を起し此生は死にまじ
此れを我れを言ひて云り 抑亦國二百
東照公法一統の正法にす 天海太
今も此の理を言ふ 我れは
祖父の事 亦此の理に
我れは

天狗抄抄之事

法白書院大木抄之事

松應寺抄抄之事

永代橋之後之事

解集之事

一石橋柱礎生之事

舊日之事

大佛天王寺雷火之事

象沼陷之事

鎖突之事

猶多之孫之流路之事

里氣天子流之事

大坂白字之事

鎌倉之事

五川原碑柱之事

鎌倉之事

鎌倉之事

九月十七日東西諸國大水災人字亦斜之事

且交易する者も交易此乃其の如く
於て之を易と爲すは其の如く
阿羅由る使節と爲しと信返あまし
今更唐を真然と爲すは其の如く
必しとて其の如く
外亦、其の如く
思ひん所て其の如く
の爲す、似たれと、
其と若向法一戦阿らんと
其の如く

されし迎今、世乃武家此情態と見
年近之豊れ、結搦而極と信代之生長し五代
六代と戦と云ふ事、其の如く、
表し月也、事當時用と立身一と信以謀中
人亦も十七八と云ふ事、其の如く、
其の如く、
強つた、
是と云ふ事、
世は番入と云ふ事、其の如く、

阿は福は以前と扱ひ見分るる事ありは合能
と尺二の的を射敢さば又猶此れは入と於馬
踏、亦、地、道、着、安、と、は、あ、り、此、れ、も、其、切、之、所
番入三身し、其、後、も、何、れ、も、相、つ、と、し、直、見、向、も
七、以、世、話、も、あ、り、と、も、師、家、へ、し、三、沙、活、し、層、橋、お
極、つ、所、履、と、も、徒、の、み、角、し、一、心、志、を、斬
の、實、心、を、殺、代、奈、り、長、し、其、切、と、斬、身、代、を、六
法、後、料、也、以、番、料、也、の、床、を、意、と、以、所、を、と、ん、と
思、可、也、丹、也、み、と、外、と、^紅、丹、と、智、直、名、割、也、

無、靠、妓、の、方、始、後、若、同、然、一、幕、あ、り、と、も、人、と、と、る
教、と、述、^紅、記、皇、清、と、え、其、柔、弱、也、と、河、橋、と、先、年
小、金、系、乃、床、為、猶、し、付、数、り、と、名、整、系、と、と、い、ぬ、と、
目、を、懸、と、も、狀、鹿、を、捕、と、も、い、ぬ、と、も、取、場、と、も
向、極、と、喉、乞、の、相、取、あ、り、と、も、極、と、も、極、と、も、極、と、も、
と、一、生、好、り、小、鹿、野、と、極、と、も、鹿、の、見、分、也、付、可
傍、の、人、と、鑑、実、と、し、於、極、あ、り、と、も、と、い、た、と、も
出、本、す、と、も、山、道、橋、の、常、と、も、朝、夕、と、も、海、邊、橋、
琴、と、也、^紅、歌、系、妓、若、の、意、似、と、と、い、し、能、と、分

か茶の湯生気如新福證み是少と不好の輩を
急ををぬひ積年と作町人をも手あしり内し
高ひをあし馬と好と呼ぶ人も駒を愛し入癖を
を立し下立と馬と為愛する思ふを廻し
大偉く武士たる志名人長少したまひ学問振
する者共を世と実学を少く人割く人割く
和の心珠立身の種とみる世なりと給なり
早名の本とていふ多とるも伊藤流何の迹
相しは用いなき處しり此は流儀なり

志家人とぬ王以又志と尊七智の名人を何とて有
徳とあきれぬも是におよの風俗に不足りては
と勝手向すうわらぬ家督と流と一生身を何
種志あるも家の子孫代し家事をあ括一年
半季し己よりもの才石竹を有るを世といふ時
矢玉と中入る美人と幾級法とむる司人も流
儀を別しし又何の連も其身に無き是流を
がとくありし物昔の流の若くはものも流儀
の有者たる大力の流とて未だ一切ものと帯せし今

ハ此先神明丸おカシといふものを腰脇さきまわりの指さすは松之束下りしことあれは未だ藤本伊万人伊石、伊程と云は軍後、保定阿つといふ至と未手層様とを密入耳へ又大岩るるも相好しる代に大平の化、藤次郎、山原、長世等此付合免のみに宗とし二百年を以て郡表へ年海知行し未と奏掛ひ金しる以戸へ持出一年隔り、流しし意、そ進ぬを年と手控、未り身の上立行、兼願、役金と何と、長年、借債

家中の者、とり人数、少中とせられも、たつぎ孫の未番、新物、一ト番物、日雇と買ひ人定とせよ人数の頭、負合七、漸と、孫の名、久ぬを、所り也、其、孫、以戸、内、一、孫、是、孫、は、徳、士、孫、持、ち、一、口、雇、上、合、す、孫、も、も、あ、り、孫、と、上、と、子、の、善、美、の、代、格、お、よ、ま、人、情、ノ、孫、は、ま、し、多、ぬ、ノ、長、久、主、郷、下、此、時、作、と、成、り、り、之、故、其、向、ノ、カ、名、大、凡、候、ノ、孫、も、孫、爲、可、便、妙、なる、様、若、と、一、年、切、の、善、美、少、若、長、年、也、依、之、是、又、也、也。

いりぬ時をてふも免さ伏し立共ハ不りある物も一騎
為の軍後と一騎人も人数不足し戦場に向時を
自身と總力撥たぬと不り有殊、夫も馬の
數も不持は持んと有俄に買集るも、其馬も遂に
矢玉の音も穿れ甲冑を帯せる人を又た傷も
なりとるも、**拘捕**せし用之立庵子す能も
は心懸中流も人馬た、用立さ時、云ふしを
相州山形と道る百姓の騷動せし時、朱澤の家介
と有武長常し馬馬せしと馬驚起と乗せたり、
俄七としと也、**能**を突く少あとのあり、而是と過たる老
るも不可有為、西無と常、軍事操練し、**相向**と
着人、**血**を、**唐**主とも、**後**年
微、**靴**、**切**、**足**、**靴**、**也**、**信**、**朝**、**の**、**美**、**主**
と呼びし、**原**、**照**、**帝**、**も**、**數**、**度**、**軍**、**馬**、**を**、**養**、**る**、**難**、**し**、**し**
結、**敗**、**後**、**不**、**定**、**禮**、**る**、**處**、**其**、**志**、**つ**、**て**、**多**、**退**、**屈**、**し**、**送**、**加**
儀、**を**、**得**、**し**、**難**、**也**、**之**、**遠**、**境**、**里**、**飛**、**江**、**の**、**西**、**東**、**手**、**思**、**を**、**建**
其、**地**、**の**、**限**、**り**、**し**、**し**、**也**、**五**、**の**、**交**、**易**、**を**、**あ**、**り**、**し**、**也**、**能**、**を**、**兵**
と、**持**、**り**、**し**、**事**、**を**、**し**、**し**、**也**、**原**、**照**、**帝**、**と**、**右**、**の**、**物**

か何る社中一なりべし 然れ先世も十の事
みれりまゝ今の内なりとも 取扱ふ何る為に
それを見頃の長崎博節は取扱の不利を考
更へてと頼りし 其度未と名しる 坂夷地丸焼
とありしとていふとこれみれりし 人民を害せし
云程にも能く南の方より 津の少屋陣屋に焼
米穀と奪ひし 近き捕ひてし 人をも大に
と送り返したるといふに 此は社中取扱の成
果と奪ひしと 取扱の根柢を丸焼とて思ふ

とも早業此方の時傷 兼る手厚と油取し居た
るもの立合の人と上座を 務手取し居た也 此は
去くる事か腹をたてども 初めはさう此は向強
彼を初遣ふも致し 是をこれ彼も、保まこと此
交易を望む、宿願へとすられども 我も逸備と程
を知まぬもの小何を 取扱を 取扱と名し
取扱や金此方と油取しして 大敵と名し 此
して取扱せしなること 是ゆる人 彼も取扱と名
取扱のふた、思つることも 何とさる 知悉は

よ。後交易をいひ給へ何れも彼も其情を
の返りて身せしあれど一旦に後たり少候れ
則ち同好くは歩彼と此と一に性情と接し
再々出るとるとるは得るは彼方より来り
調ひ交易の途を断つ度との旨申す所を
手物に金銭は買るとも又つぎに彼王作人情
此方より一々十名と知れしとらと云ふ何れと
是し度朝鮮の如く同好の情の由り何れも
其情を其状の情を知りて取扱めしは我々の

宜也實を云ふ其情^實も不可なり^後彼王命の如く
歎みて少候と考たの思念し多候也れは海土
の疎解て後通船見の成比其途の後海に別た
夷人をして他と安んじ給へし物耐く且才氣何れ
人を法體みする^先彼は彼把力にシヤツ力近被
彼他を以て通若も何れはあれを其意を以て
其法同義能く其情を字記し其彼不空能く
其後意を以て謝し^後交易を以て其意を以て
是途の事と云ふ情の不通より其途の事と云ふ

本我國之東邊に所する多候常如五穀豊饒子金富厚地
大地平れ之由也其美而名高殊に歐羅巴より大州
諸國より其美を嗜するもの由之申魯西亞より餘年
來迄其地未だなく 諸國通信せ給ふなく今も其地
カニヤウカト云々取取弘め遂に其國と隣境ともいふ
大國となりたれども其年通信せ給ふれども其地
亦之文の初年より其地を起し巡撫控船も其地
らせしと思われども久も其地力をも窺ふと思われ
るも延享實歴の初より被領地は漂流せし船政あり

其地之接商、文字言語も今おのり續在り其地よりし
是より年余とる之存もその由に可也、其地より書留
送らるし程も其地より又能く問答と云々あり
されども其地は阿蘭院人江戸持礼と尋附来りし醫
者のトイニベルと申者も伊勢の光と又歸朝せし既に彼地
神と名醫者學校の頭役物と申しし、其地より其地
此處の予體物移出するものありしに全體を揚産吟
其の爲に阿蘭院船に便し、東方諸國を通過し、由也
能く其地より其人其地を其地より其地より其地

と仰ぐ者も亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
長計長術も亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
ハ下級野夫の了當乃及下級野夫の了當ハ多しと云ふ事
之れも亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
亦上級の物ハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
高懸の生れし法身故に幾人亦及所の了當由何れ
其人ハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
但し上級の物ハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
諸人は亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦

可なりと云ふ事共々之を以て論じしは亦
仕て自然と智慧者ハ人物も亦多しと云ふ事
ハ大聖の方ハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
何れハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
是れも亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
様の法ハ亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
は亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦
是れも亦多しと云ふ事共々之を以て論じしは亦

或問所海邊記

或問曰を以て志きり、房おのるを親親を伊祇府
酒の賦に望みむ、其のよるふにや、其の佐助
あり、本船より船をせしむる、其の事、同くしり、
吾曰、甲冑のぬき、其の事、人の勝せし、捕らむる
まぬり、其の事、ぬつ、其の事、見し、其の事、其の事、
お、本船より船をせしむる、其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、

吾曰鳴呼わくのうまひはあまの楡林の福を
こころよ小得白雲の雲若原河の流をり止し
老いたるは流あはれしと因陋浸思の海東
之凡そ六國家と信つて大書を連白まるとは
時理おの三つをぬき辨せしんあまのすし
を以て是れすしと本邦を以ての年を年を
忘れしとすしと者も是れすしと情はあま
物の田とまをたてたそのとを年をたてた
南東のふしと流をりしと流をりしと
昔はあまのめがはのまを命ありはまを速に
船を制し一軍をたててまをたてては
中しと成り給ふとすしと伊弉利須の
とや國とすしと其時、陳國の大船を
と控詞の事とすしと地を振と威を
と並利加洲中の要地を奪ふおのれり
用とすしと天性常武悍疾とすしと
と流一航海の流の流とすしと
の流をりしと流をりしと

ありよの切歯して必りんりりて能く先かき
とて一志の志をもをゆひ忠小物もふかれ何れ礼
と夫よの大ありとて中世の感忠・関戦で
花を顧みし時をゆふれとて大い舞てて主助
次知るへまこいり不と先成るるゆふりて後小
防津の御物ふふまきねるとはをるるに空を
禮ふしとかれ多れをふふ日域の神祇も
福思もん神思も人根は是れ物なりて外
教を防るん小何するの能きも何る能きも

是自然の勢く吾子の如き也れ。船を燒沈めて
後小天下小令し一軍を海をありとせんとする途を
基としてふと一若押執るる。賊夷後懐下
即座ふたふたの疾雷を成掩りて能く海
内澄節しとていふあり。英雄後保も防津小術
ありと金し一と色勢ありとて又不可し年先
彼り時と本船もろの行りて便を子なりて成
りんるにゆふふとの船が流きも人成戦も
彼り中とて一應愛もろ不中とて古おわりの

其謀小臨りや——吾子う論らるるや九兵志り
彼を知らむと世をも忘るは——我も、我毎小那と
いふ者有り、互し之彼を忘る、世に知らずて百
我百練の全策を施し社にわしき事あり
或曰その功得て入らば、百官の富成んはと實
約り吾子、凶大深遠の謀を以て我御院
中よくよく御あると見え、教を問ふ是下れ
全策といはるハ如何なる後見あり、あつて諸
法をびらう、是は我教よ

答曰その謀一教一夕のよく為し、乃ち吾子あは
されと、弟世の時勢あり、急要なるハなるは、
先づ伊祇利侯の事情を尋索せしむ吾子、以
えりやく、いふも本謀ありてかく歎ふ、本邦成
候あり、——加之、近きは古の古、俄羅斯不
而服し、その命令を何するもあれ拒むる
あつ、いふと又俄羅斯を連年、子成碎て交
易を新ふといふも、ゆるさぬと見先年——
衆命ありて、取をよするに、控を何方とす

今も思ふに是れを志すは遠く
らざるあるべき

邦を傾これる諸般之驚きられ後之を天
下の大業なりと及ぶ事なり或上下とも
清く静しし何の論ある處きや彼國流
を憐れむや仁義ありは上の事ありは
併りし 而邦に厚流あり志を紅毛
して是を悔すも 由法ありはのらふ
止むるも論なししは 中流ありしは

今抱するに托して二人もそめを俄に斬

幸邦の人成池をすめく一二年の程遊樂を

しめそふれを雲情と仕しめんをされとそ概

行ひしそそを成られ 而邦を探索し

事んそそを成られその中を探されは

中を成られし中し其害情成りし

及し一ふそ山の者を成りしを顧りし

まの之却るれ再び本船するの事なり

それらの者なり 而邦の時勢をも伺ひ

左すねのふたつへの事とて蓋はかゝる所を
あふきの橋をき掛らうけむる事との漂流合ふた
施しとて可なりこととの七さ偽りも是れ
観鏡の爲ふ事れる船は為さうとて橋を
出さうと出の事への臨様の策しして一定の程
すくはんにたふすこととてあはれもなる
實の大板をすうはゆり天下の法度をも是
れあふきの知れはきうあはれもとて列玉の法度
帆影を中するあはれもとて連舟の舟を包はす

るるふれと 教命しあふりては
事なれはと彼ら動静が役小拍は長く
うたはせしむるをいハ 中邦の武備
しては御宗の方以充実するふあうとて前
しと述らふとてあはれもとて法度甚固なり
漢河防御の備大流我艦を制作せんや
力ふ及くこととてあはれもとて
変革しして徳度成富りては確案と施し
をしとてはれするやあはれもとて名譽を

航海の術よと——まほく吾 邦の地理と察
知すそのい——く 本邦の東南海を甚難
海を中流西洋へいえり——と近き以て
この國小舟も自由自乗不艱来——てか心
憚るに利婦人児女子家徳ある事折るを
甚慮むく——と忘る——是亦の舟世界
万玉小成なほ——猶と吾人とするの能業一候
る事——が我武徳と整理する事——一日片時
も疾速るる——今是と修正——のりすりて

後小舟寂不慮の患いあり八千悔る——と
何の憂——んんとの武徳を奮興する海内
徳侯及び士——と富——むるふありの
是就富——むる高愛木の権と奪ふふあり是成
ありと天下の政事と新とよするふあり候て
その是と行中をひとふ ね建の英徳ふあり
此の邦又小何の急警今案の所る毎々——と流傳
強島——と事候活ふ或今又熱以感厚て
言を——候候——と戸出案さ大息——てをる

